

日本財団助成事業 てらネット合宿 in 雪国 実施報告書

主催 (社)雪国青年会議所

共催 全国てらこやネットワーク

後援 南魚沼市、湯沢町、南魚沼市教育委員会、湯沢町教育委員会

助成 日本財団

はじめに

近年、少年非行の悪化、学校における問題行動や不登校など、青少年に関する様々な問題は山積しております。このような問題の背景には、青少年を取り巻く社会環境の変化や自己中心的な考えが蔓延し、社会全体のモラルが低下していることが考えられます。青少年の自立を育んでいくためには、地域社会の構成員である家庭、学校、企業、公的機関、そして我々JCが連携を深め、多様な青少年育成活動を展開していくことが必要と考えます。

この度は全国から小学生を対象に参加者を募り、新潟大学教育学部の学生が主体となり考えられた様々な企画のなか、外で友達同士または地域の青年たちと駆け周り、遊ぶ事の少なくなった子ども達が、大学生や他地域の子ども達と2日間に亘り触れ合うことにより、コミュニケーションの楽しさや、互いに思いやり協力する事の大切さ等を学び、また気付きを与える事を目的としています。そして私達大人は、現代の子ども達に欠けている『群れ遊び』を教える事が、青少年の健全育成に向け、必要ではないでしょうか。

・活動内容

1日目 開会式及びオリエンテーション

初めて会った子どもたちが、
ゲームなどを通じて打解け合えるようにしました。



チーム対抗雪合戦

小学校1～6年生と大学生を含めた8名程度のチームに分かれて行いました。雪に馴れていない子ども達を雪国の子ども達が助けるなど、同じ目的に向かって協力し合い、互いの信頼関係を築いていきました。



記念撮影やおやつ

連帯感や信頼関係が生まれたところで、休憩を入れたことにより、子ども達が自主的にコミュニケーションをとることができました。



キャンドルアート

日が落ちてからは雪の幻想的な一面を体験。



学生ミーティング

1日目終了ご各地の大学生が本日の反省点や二日目の企画について、ミーティングを行い、事業の真意まで深く掘り下げた議論が深夜まで交わされました。



2日目 チーム対抗リレー

学生ミーティングで話し合われた企画が行われました。学生を含めた子ども達同士の絆がより深まり、1人1人が積極的に話し合い助け合う場面が頻繁に見られるようになりました。



自由な群れ遊び

最後にチーム関係なく雪上の拾いグラウンドで各自思い思いの群れ遊びをおこないました。なかなか馴染めていなかった子どもも、仲間を作り思いっきり雪上を駆ける姿がみられました。



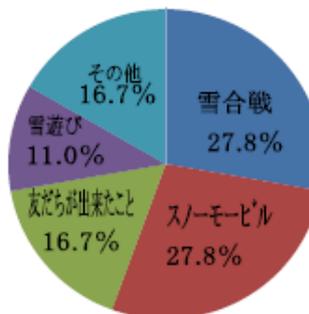
子ども達のアンケート結果(雪国児童)

「てらネット合宿 in雪国」アンケート結果 (雪国児童用)

1、今回の「合宿」で思い出に残った事を書いてください。

| | |
|----------------|----|
| ・雪合戦 | 5名 |
| ・スノーモービル | 5名 |
| ・新しい友だちが増えたこと。 | 3名 |
| ・雪遊び | 2名 |
| ・おもしろかった | 1名 |
| ・おやつ | 1名 |
| ・みんなでゲーム | 1名 |

思い出に残った事



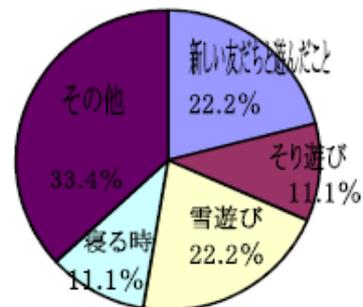
2、新しい友達は出来ましたか？

| | |
|------|-----|
| ・はい | 18名 |
| ・いいえ | 0名 |

3、新しい友だちとすごした中で一番楽しかったのは何ですか？

| | |
|---------------|----|
| ・新しい友だちと遊んだ事。 | 4名 |
| ・そり遊び | 2名 |
| ・雪遊び | 4名 |
| ・寝るとき | 2名 |
| ・全部 | 1名 |
| ・雪合戦 | 1名 |
| ・リレー | 1名 |
| ・お風呂 | 1名 |
| ・みんなでご飯を食べたこと | 1名 |
| ・スノーモービル | 1名 |
| ・サッカー | 1名 |

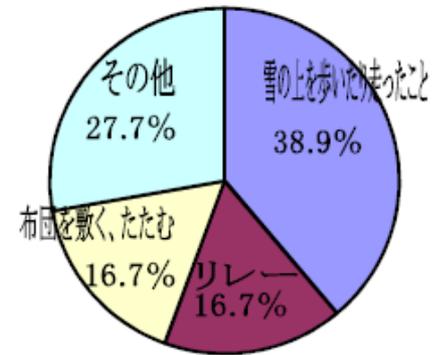
一番楽しかったこと



4、何が一番大変でしたか？

| | |
|-----------------|----|
| ・雪の上を歩いたり走ったこと。 | 7名 |
| ・リレー | 3名 |
| ・布団を敷く、たたむ | 3名 |
| ・寝る準備 | 1名 |
| ・なかった | 1名 |
| ・眠れなかった | 1名 |
| ・雪合戦 | 1名 |
| ・寒い | 1名 |

一番大変だったこと



5、また「てらネット合宿 in雪国」に参加したいですか？

| | |
|------|-----|
| ・はい | 16名 |
| ・いいえ | 2名 |

子ども達のアンケート結果(県外の児童)

てらネット合宿in雪国 児童用 アンケート集計

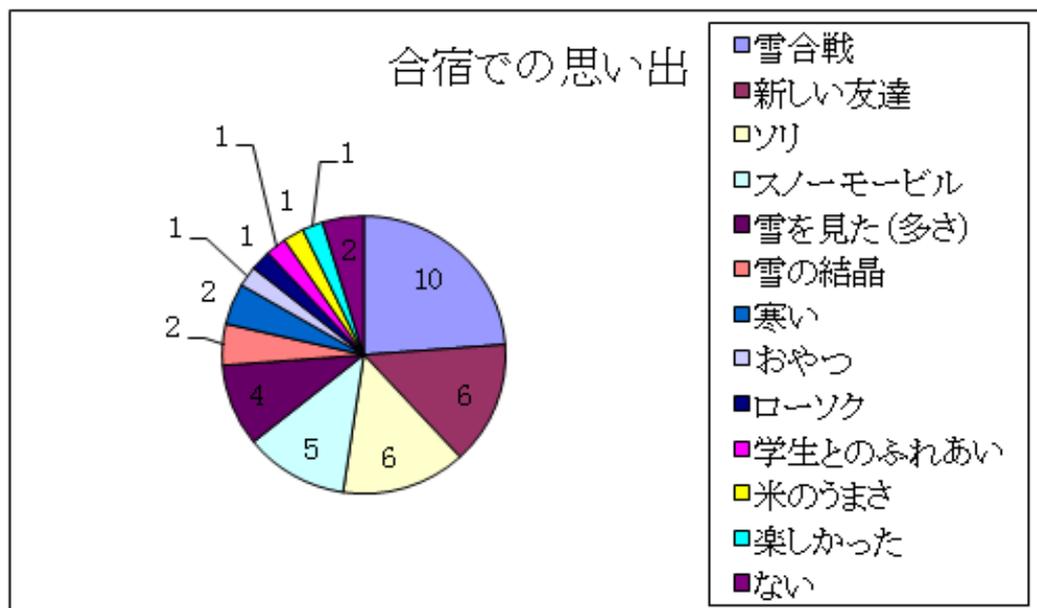
1. 今回の合宿で思い出に残ったことを書いてください。(複数回答)

イ、雪がたくさん降っていてビックリしました。いろいろなことが出来てとても楽しかったです。

ロ、雪合戦が一番だったので思い出に残りました。スノーモービルに乗ったことも楽しかったです。

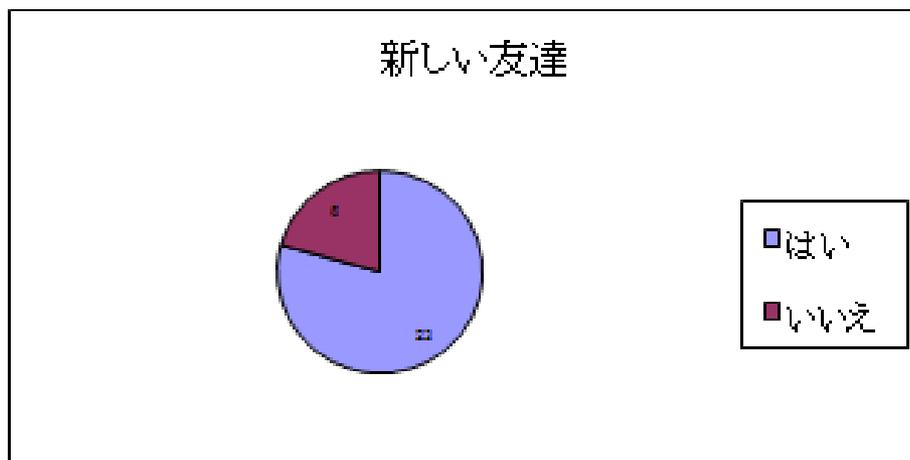
ハ、自由時間に初めてソリをやったのに、とてもうまく行って、競争の体勢でも出来るようになったことがとてもうれしかった。

| | |
|----------|----|
| 雪合戦 | 10 |
| 新しい友達 | 6 |
| ソリ | 6 |
| スノーモービル | 5 |
| 雪を見た(多さ) | 4 |
| 雪の結晶 | 2 |
| 寒い | 2 |
| おやつ | 1 |
| コーソク | 1 |
| 学生とのふれあい | 1 |
| 米のうまさ | 1 |
| 楽しかった | 1 |
| ない | 2 |



2.新しい友達は出来ましたか。

はい 23
いいえ 6



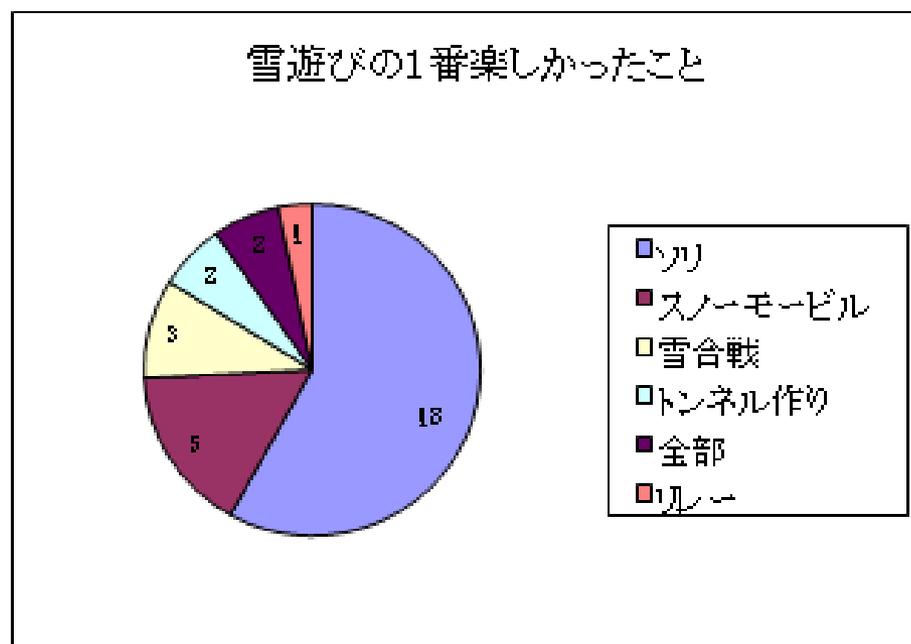
3.雪遊びの中で1番楽しかったことはなんですか。(複数回答)

イ、ソリで滑ってひっくり返ったこと。

ロ、雪のトンネル

ハ、雪合戦

| | |
|---------|----|
| ソリ | 18 |
| スノーモービル | 5 |
| 雪合戦 | 3 |
| トンネル作り | 2 |
| 全部 | 2 |
| リレー | 1 |



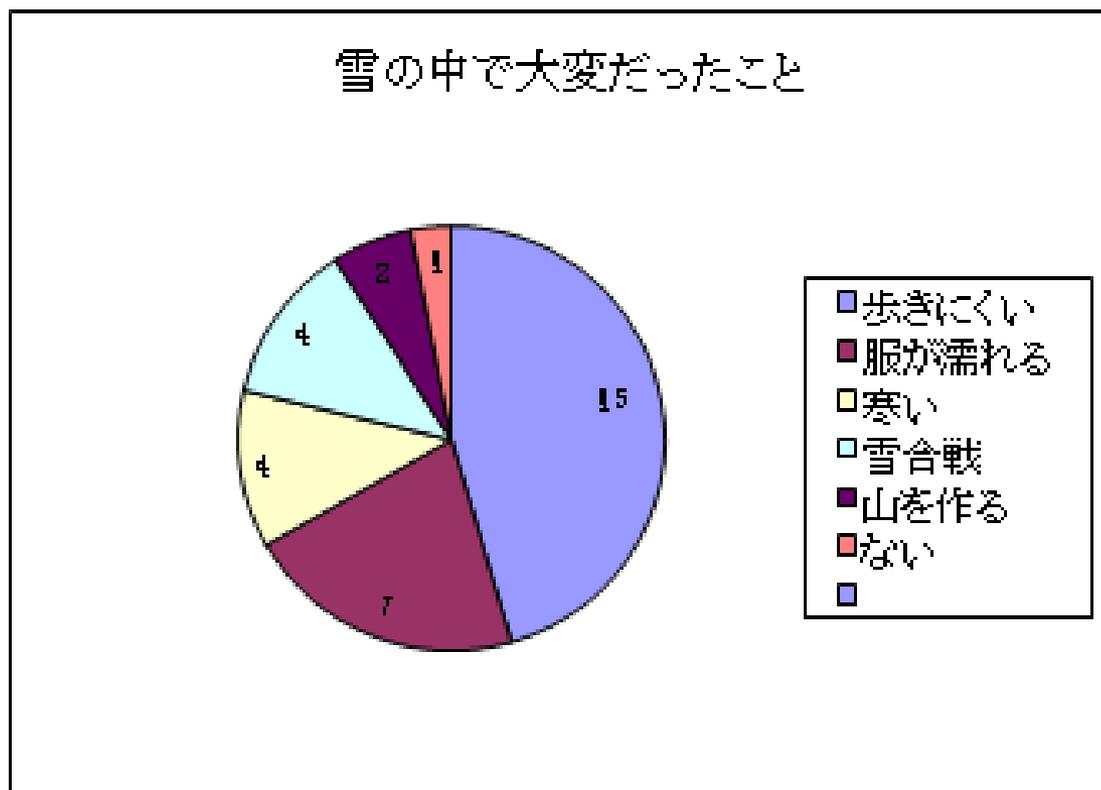
4.雪の中で遊んでいて大変だったことはなんですか。(複数回答)

イ、走ったり、歩いたりすること

ロ、靴を一足しか持っていけなかったので帰りの靴がビショビショだった。

ハ、雪合戦で玉を作るのに端っこに行って玉を作るのが大変だった

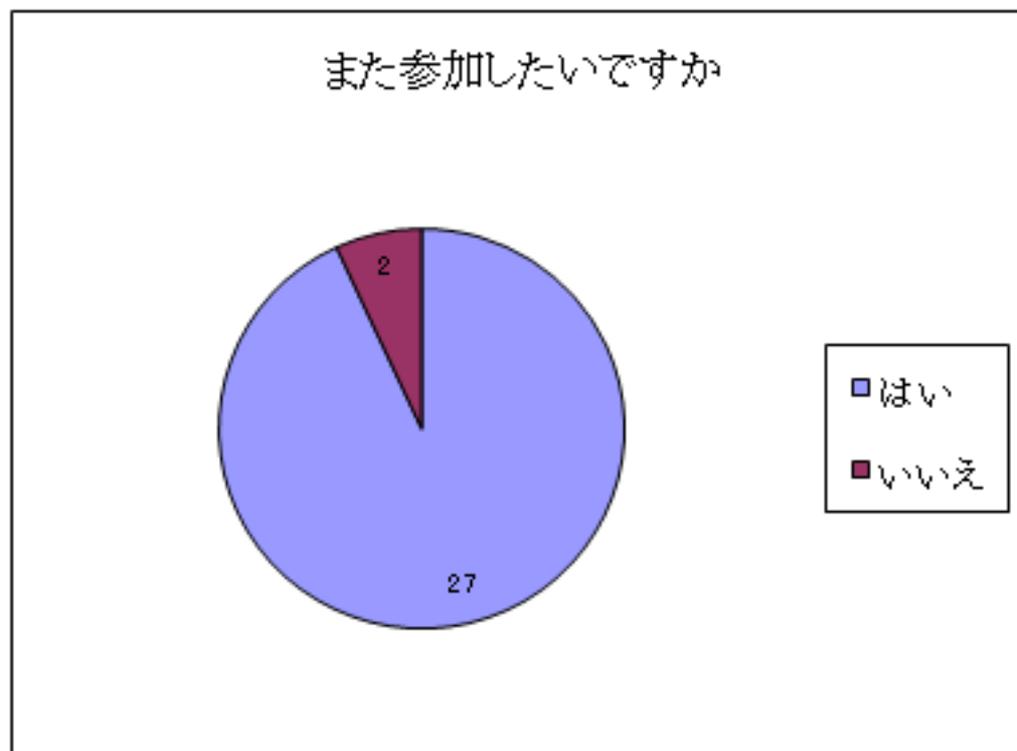
| | |
|-------|----|
| 歩きにくい | 15 |
| 服が濡れる | 7 |
| 寒い | 4 |
| 雪合戦 | 4 |
| 山を作る | 2 |
| ない | 1 |



5.また「てらネット合宿in雪国」に参加したいですか。

はい 27

いいえ 2



保護者のアンケート結果

「てらネット合宿 in雪国」アンケート結果（保護者）

1、今回の「てらネット合宿in雪国」に参加させた目的はありますか？

- ・雪国に行ったことが無かった買ったので、子供に体験させたかったから。
- ・他の地域の子供とお友達作り。
- ・兄弟けんかがすごく多く、体験することで少しでも変わればと思い参加しました。

2、大学生や協力者(保護者以外の大人)と過ごす機会についてどう考えますか？

- ・あまり接する機会のない学生と過ごすのは、新鮮で子供は楽しそうだ。
- ・親先生以外の大人と接する機会が少ないので、地域の大人と接することが出来て子供の成長、体験には良いと思う。
- ・学校や家庭では体験できないことが良いと思う。

3、他地域の子供たちと交流する機軸についてどう考えますか？

- ・地域が違うことによって、ルールや仕組みが違ったりし、お互いを尊重しないと、友好関係が成り立たないことを学べる。
- ・普段会えない子供たちと交流ができるのは、良いと思う。

4. 今後も各地で同様の取組を行なって参りますが、費用負担はどのくらいが妥当と考えますか

- ・地域にもよるが ￥15,000～ ￥20,000
- ・地元なので ￥5,000

5. 今後も同様の事業に参加させたいですか。

- ・はい 2名

6. その他ご意見がありましたらお願いいたします。(改善点、ご要望等)

- ・子供にとっての素晴らしい雪国体験、有難うございました。
- ・写真などありましたら、DVDで送ってください。(親も映像で見たい為)
- ・親も参加したいです。
- ・子供に色々な体験をさせていただき有難うございました。子供の話が楽しみです。

学生のレポート1

・今回の合宿を通しての反省と感想

自分は夏のおてら合宿と今回で2回目の雪国の合宿に学生のアシスタントとして参加したのだが、夏のおてら合宿と違ったのは、今回は多地方から子どもたちが集まり、子どもたちに楽しんでもらうのはもちろんだが、いかにして違った環境で育ってきた子どもたちが自分たちだけのグループを作らず、まわりに馴染んで遊ぶことができるのかというところが問題となった。

実際に子どもたちと接してみたのだが、まず初日の雪合戦に関して、雪合戦では均等にチーム分けをしていたのだけれども、結局仲のいい友達だけで固まってしまい、期待していたチームみんなで協力するという様子が見られず、またルールが少し複雑だったせいで子どもたちにうまくルールが浸透せず、それによって子どもたちのケンカが生まれることもあった。そのこともあって、初日の夜に反省と次の日の遊びについて学生全体で集まり、次の日にどうやって子どもたちをまとめていくのかを話し合った。

話し合いの主な内容としては、根本的な今回のテラネット合宿のねらいと、翌日の遊びの内容を初日の反省を活かしてどのようにするのかというものだった。ねらいは子どもたちが楽しむことを前提として、他地区の子どもたちと地域の特徴を活かしながら仲良く遊んでもらうというものだった。それを踏まえて議論した結果、遊びの内容は二人三脚のリレーになった。2人で協力すること、他の人の応援をすることで、地域に隔てなく関わり合い、その後に自由時間をおくことで、その時に仲良くなった子どもたちと自由に遊んでほしいという期待を込めてこうなった。結果的には成功と言っていいくらいに仲良くなってくれ、たくさんの子どもの笑顔が見れたのでよかったと思う。ただ、反省としては初日の反省が出る前に、よく考えれば初日から2日目のような対応ができたのではないかと思った。また、今回の合宿を通して、自分たちが相手にしているのが「子どもたち」ということが思い知らされた。いろいろ計画をして臨んでも、大学生のスポーツ大会ならすべてプラン通りに進めることができるのかもしれないが、子どもたちが相手ではいつ用意してあったプランが崩れるかわからないので、いつでも臨機応変に対応できる柔軟性が必要だと感じた。

ただ、やはり、このおてら合宿という企画はとても素晴らしいと思うのでこれからも続けていってほしいと思う。

学生のレポート2

去年の冬の合宿には参加できなくて、今年が初めてでした。県外からもたくさん子どもたちや学生が参加してくれて、とても楽しかったです。雪が珍しい県外子どもたちは、雪でとても楽しそうに遊んでいたのが、印象的でした。

各班、県内県外子どもたちがいたので、開校式のときなどに、班の中で簡単な自己紹介をしていればよかったですと思いました。また学生同士も、打ち合わせのときなどに自己紹介を行っておくべきだと思います。県外子どもたちとの交流の輪を広げるためにも、2日目にグループ対抗のリレーをやったけど、その前から自己紹介など少し工夫をしていれば、もう少しスムーズに子ども同士が交流できたのではないかと思います。また雪合戦では、ずっと入りっぱなしの班があったり、ずっと休憩の班があったりと、飽きてきている子どもの中にはいたので、対戦の順番なども考えなければいけなかったと思います。ウエアや手袋、靴がぐちゃぐちゃになるまで遊んだので、2日目まで乾ききっていない子どもたちもたくさんいて、乾燥室に全部詰め込みすぎたのかなと思いました。部屋にもハンガーや干す場所があったので、部屋にゴーグルやウエアなどあまり濡れなかったものを干させればよかったですと思います。

私たち学生も、スノーモービルなどに乗れる機会などめったにないので、初めて乗ってすごく楽しめました。子どもたちとそりに一緒に乗ったり、雪合戦をしたり、とてもいい体験ができました。私は地元が山形なので、小さい頃は雪でばかり遊んでいたのが、とても懐かしく感じました。そして、他の学校の大学生とも仲良くなることができ、とてもよかったです。学生ミーティングのときの早稲田の学生の発言には、ビビりましたが、とても勉強になりました。

2日間、このような貴重な体験をすることができて、とてもいい思い出になりました。子どもたちも、とても楽しかったと、また来たいと言ってくれていたのが、とてもうれしかったです。いろいろと準備などありがとうございました。お疲れ様でした。

学生のレポート3

自分は今回の雪国合宿に参加して、反省すべき点がいくつかある。1つ目は自分の立場・役割を100%発揮できなかったことである。今回の自分の立場は班のメンバーの1人として子どもたちと一緒に活動しなければいけなかったが、自分は総括の大谷のサポートに力を入れてしまい、班のメンバーと一緒に活動することが少なくなってしまった。自分たちも代替わりのつもりで2年生主体で雪国合宿を計画、運営したのに、まるで自分も総括の1人みたいな行動をとってしまった。自分自身で今回は2年生に任せ、困った時はアドバイスをしようと思っていたのに全くできておらず、自分が思ったように行動してしまった。自分の立場・役割を十分に理解したうえで任せるところは総括や後輩に任せるべきであったと思う。夜のミーティングでも進行をスムーズにしなければいけないのに同じ所で足踏みをしてしまい、スムーズに進行することができなかった。このことは将来自分が学校もしくは企業に就職したとき求められる力であると思うので、進行をスムーズにし、同じことで時間を割くのではなく、様々な意見を出し合って話し合うことに時間を使えるよう進行としての力をつけたい。自分は書記であったが、書記も記録だけでなく司会をサポートし自分からもミーティングをコントロールできるようにしたい。また、今回の子供たちはとても元気な子供が多く、学生が動けなくなるまで走り回っていた。自分たちと子供たちが一緒になって遊ぶのに自分たちの方が先に動けなくなってはせっかく新潟まで来てくれたのに大学生と十分に遊べなかったと思われぬように、体力をつけて子供たちと最後まで遊び通せるようにしたい。

この合宿で嬉しかったことは、やはり子供たちが楽しく雪で遊び、雪国のおもしろさを味わうことができたことである。自分たちが計画した遊びについても楽しそうに遊んでいた。しかし、雪合戦に関しては球を当てられたのにコート外に出なかった子供がいたり、指定の場所でなく、その場で雪玉をつくるなどルールを守らない子供がいたのでルールを守らせるような対策が必要であったと感じる。もう1つ自分の中で嬉しかったことは、雪国の子でなく県外からきた子が自分のことを覚えてくれて慕ってくれたことである。それだけでも自分は嬉しかったのに、さらにその子が去年の冬に行った合宿をきっかけに学校へ行くようになったという話を聞いて、驚いた半面とてもうれしかった。また、その時にその子があまり学校に行っていなかったことも初めて知った。去年はとても元気に遊んでいたの自分はそのとは知らなかった。その子が別れ際に泣きそうになりながら「また来年も来るから来てね」と言われ自分の方も泣きそうになってしまいました。

今回の雪国合宿でまた自分は多くのことを学ぶことができた。実際の学校生活では見ることができない子供たちの姿であったため、教育実習等では学ぶことのできないことが多くありました。それもこの雪国合宿を計画し、自分たちのわがままにも快く引き受けてくれた雪国JCの皆さんのおかげだと思います。本当にありがとうございました。自分は来年4年生になり、雪国の活動に参加することが難しくなるかもしれませんが、できる限り活動に参加したいと思います。できなくとも後輩たちにアドバイスをして少しでも手助けすることができればいいなと考えております。

本当にありがとうございました。

学生のレポート4

今回「てらネット合宿in雪国」に参加して普段あまり関わることのできない他県の子どもたちや学生と触れ合うことができ、とても貴重な経験となった。新潟出身の子どもたちは雪に慣れていたが、大阪や愛知から来た子どもや学生はたくさんの雪に触れ、普段なかなか経験のできない遊びやレクリエーションをととても楽しんでいる様子がとても印象的だった。個人的な反省点としては、大阪から来た子どもたちとあまり触れ合うことができず、また大阪の子どもたちとそのほかの子どもたちとの距離を近づけてあげることがあまりできなかった点である。たったの二日間で親密な関係をすぐに作り上げることは難しいが、グループの活動にしる自由時間にしろ大阪の子どもたちだけでかたまって、なかなか他の子どもたちと打ち解けないように感じた。そこで学生側からもう少し働きかけることができたのではないかと思う。それぞれ楽しく過ごしてもらうことも目的の一つであるかもしれないが、他県の子どもたちとも触れ合える貴重な場であるからこそ、もっと距離を縮めてあげられたらと思った。

今回の合宿での大きな問題点は子どもたちのウェアや手袋などの管理である。レンタルしたウェアや手袋、ゴーグルはデザインが同じものが多く、自分のものがわかりづらくなってしまいう状況だった。レンタルしたものであっても一時的にすぐに自分のものであるとわかるような名札を付けるべきだったと思う。また、個人の私物であっても名前が書かれていないものも多くあったので、自分のものがわからなくなってしまったり、間違えて持って行ってしまうということも多かった。このことから事前に私物には出来る限り名前を書くようにした方がよいと思った。そうすることで子どもたち自身が困らなくなるだけではなく大学生も管理しやすくなるので、できれば徹底していただきたい。

今回は雪が大きなテーマであり、たくさんの雪に囲まれた環境を通じて交流を深めることができた。雪のある環境は地域によっては特別な環境だと思うので、普段雪と触れ合う機会の少ない子どもたちにとってはとても貴重な体験になったと思う。また初めは話しかけてもなかなか反応を返してくれない子どもや、親から離れられない子どもも、合宿が終わるころには子どもたちの方から積極的に話しかけてくれたり、「一緒に遊ぼう！」と誘ってくれたり、二日間という短い期間でも子どもたちにとっても大学生にとっても大きな収穫が得られた合宿だったと思う。より多くの子どもたちに参加してもらいたいし、今後もこのような活動が続いてくれたらと思う。そして今後もこのような活動には積極的に参加したい。協力してくださったすべての方々に感謝したい。

学生のレポート5

<良かった点>

- 企画段階から関わることができたため、企画の手順などを知ることができた。
- 当日は、子どもたち特有の性格というか特性のようなものを知ることができた。
- 子供たちだけではなく、学生も幅広い交流を深めることができた。
- 様々な人からの話を聞くことで、自分たちの足りない部分や、課題が見えてきた。

<反省点>

- 学生同士の話し合いの場をうまくまとめることができなかった。
- 子供に圧倒されてしまっていた。

というのも、私は、学生が子ども達に対して「こんなものもあるよ。」「やってみない?」といったように遊びを提案するべきであるという考えを持っていたのだが、当日は学生が子どもに手をひかれている場面が多々見られたため、この反省をあげた。

- 特定の子どもとしか遊ぶことができなかった。

学生は子ども同士の仲介役でなければならないと思う。子どもは、初めて会う他県の子どもより学生の方が親しみやすいと思う。なので、学生が積極的に子供と子供の仲介役になってあげれば、より深い交流を行うことができたのではないかと思う。

- 安全面への配慮が足りなかった。

具体的にはスノーモビルのスピードを出しすぎてしまったということがあげられる。子ども達が安全に楽しく遊べるように心がけるべきであった。

- 雪合戦。

ルールが伝わっていなかった部分があった。言って聞かせるだけではなく、視覚にも訴えかけるようなものを用意すべきであった。また、賞品などがなく、子どもたちは勝ってもそれほど盛り上がっていなかった。もっと燃えるようなものがほしかった。

<まとめ>

私は、昨年もこの事業に参加していたため、正直なところ気楽な感じでのぞんでしまった所があった。それがそっくりそのまま今回の事業の反省点につながってしまった。今後は慣れているからとかそういう感情はリセットして、常に新鮮な気持ちでのぞまなければいけないと思った。

今回も私たちのわがまを多く聞いてくださり、ありがとうございました。またよろしく願います！！

学生のレポート6

(1)参加目的

今回の企画に参加した目的は大きく分けて、二つある。まず一点目は、子どものためである。これは雪国の企画に参加してくる子どもたちに雪で遊ぶことの楽しさを味あわせてあげたい、というねらいの下で様々な機会を提供しようと思ったからである。次に二点目としては、自分のためである。子どもたちの活動の様子というのは、実際に子どもと一緒に活動して初めて見えてくるものだと思うので、子どもはどのような雪遊びを好むのか、あるいは子どもを楽しませるためにはどのようなことが必要なのかなどを、直接的な体験として得たいと思ったからである。

(2)合宿を終えての感想

冬の企画では初めての参加であったが、総括というポジションでプログラムを運営した。実際に体験してみると想像以上に体力を要することが分かった。しかし、企画をスムーズに実行してゆくためには、全体に指示を出して進めることが重要であると、改めて実感することができた。また、今までの企画とは違い、他の地域の大学も参加していたこともあり、それぞれの意見や感想を聞くことができ、とても刺激的な二日間であったと感じた。

(3)成功例及び失敗例

今回の企画の成功例としては、まず根本的にこのような企画を行ったこと自体が成功であったと私は思う。それは、雪をよく知っている地元からきた子どもと、雪をほとんど知らない他県から来た子どもが同じ空間で交流を深めることや、雪で遊ぶことの楽しさを一人ひとりに実感させることができたと感じたからである。具体的なところでは、オリエンテーションや、全体で企画をしてから個々に自由に遊べる時間を設けたことなどが挙げられる。一方、今回の企画の失敗例では、初日の雪合戦を2つのコートで行ったため、子どもたちに空き時間ができてしまい退屈な思いをさせたことがまず一つ目にある。次にキャンドルアートを見る際、子どもたちが興味のある子とない子とで二極化してしまい、興味のない子が遊具の方に行って遊んでいたことも、今後改善する余地がある。また個人的であるが、総括として全体に指示を出す際に、この後どうなるかと予測することを怠った結果、二日目の学生企画に遅れを招いてしまったことは最も反省すべき点であると思う。

(4)終わりに

今回の企画が無事に成功したことは、理事長や会長をはじめとするJCの方々の協力があったこそだと思いつても感謝している。反省すべき点をさらに追及して、今後の活動に活かしていきたい。

学生のレポート7

昨年も参加させてもらったが、今年はさらに楽しい内容になっていたと思う。具体的には、スノーモービルに乗れたり、キャンドルアートが見れたりなど、子どもの好奇心をくすぐるような内容が増えてよかったと思う。

昨年は、なかなか友達が作れずに1人でいた子とずっと一緒に遊んでいた。最初は楽しみなさそうにしていたが、徐々に自分に打ち解けてくれ、楽しそうに遊んでいた。しかし帰り際、保護者の方に「学生さんとだけじゃなくて、もっと他の子とも遊んでくれれば良かったんだけどねえ…」と言われてしまった。

それ以来、夏のおてら合宿や実習など子どもたちと触れ合う機会には、このことを常に頭に入れ、他の子どもとの関わりが持てるような働きかけを意識してやってきた。今年の雪国でも、もちろんそのことを意識して臨んだ。

昨年ずっと一緒に遊んでいた子が今年も来てくれていた。同じ班だったため、一緒に遊びたい気持ちはあったが、あまりべったり一緒にいないように気を付けた。すると、初日は周りの子とまだぎこちない感じがあったが、2日目になるともう新しい友達ができていた。「新しい友達できた？」と聞くと、嬉しそうに友達を紹介してくれた。

学生が子どもと子どもの間に入り、周りに何らかの働きかけをしなければならないと思っていたが、必ずしもそうではなくて、子どもたち自身が自然にできるということに気づくことができた。

しかし、大阪の子どもたちはなかなか新しい友達ができないようだった。そんな時にはやはり学生が上手く働きかけてあげる必要がある。そのためにも、まず学生たち自身が打ち解けなければならなかったのだが、それが出来なかったのが今年の反省である。もっと積極的に関われば良かった。

今後は、子どもたちだけではなく、まず自分たちが積極的に仲良くなっていい関係をつくり、子どもたちも自然に仲良くなれるような雰囲気をつくっていきたい。

かなり前から企画を練って、準備をしてきたので、子どもたちの楽しそうな笑顔がたくさん見れて本当に良かったと思う。

ありがとうございました。